

5月の行事報告「宗祖降誕会法要」・「門信徒総永代経法要」5月16日(日) 13時 May



五月十六日、中原寺の宗祖降誕会法要・門信徒総永代経法要に参加致しました。法要の内容は従来とは違う内容でした。まず、宗祖降誕会の内容は、音楽に従って、婦人会の方が献灯・献花を親鸞聖人像の前に捧げました。次に法要の開始を知らせる行事鐘が鳴り、法要が開始致しました。法要の内容は、礼讃文(三帰依文)、ちかいのうた(重誓偈の和文)でした。

引き続き、門信徒総永代経法要が開始致しました。内容は、御住職の先請伽陀、表白、讃仏偈でした。

この後に、法話があり、最初に御住職が法話をされました。法話の前に仏旗についての説明をされました。

全世界共通のシンボルのマークで、それぞれ色の意味を話されました。

青色はお釈迦様の頭髪を表し、定根といって決して揺るぐことのない心持ちを表わす。黄色はお釈迦様の身体を表し、金剛といって決して揺るぐことのないしっかりとした心を表わす。赤色はお釈迦様の血液の色を表し、精進といって大きな慈悲の心で全てのものを救うという働きを表わす。白色はお釈迦様の歯の色を表し、清浄といって清らかな心を表わす。オレンジ色はお釈迦様の袈裟の色を表し、忍辱といって耐え忍ぶ心を表わす。というご説明でした。

次に法話に入り、講題は「誕生の意味」で、親鸞聖人のお誕生日を通して、生きる意味とは何だろうかについて

お話をされました。

無量寿経にある、阿弥陀様が法蔵菩薩として地位や財産を捨てて(偽りを捨てて)仏道に入ったことを考えながらお話を聞かせていただきました。

次に、前住職の法話で、講題は「旅立つ人は善知識」でした。永代経とはどんな時代が来ても尽きないということ、滅びないということであり、それを大事に受け止めて、すべての軸となるものを伝えていくことが大事であるとお話してくださいました。

親鸞聖人のお誕生日というご縁を通して、私も人生の後輩達に色んなことを伝えたいと思わせてくださり、素晴らしい一日を過ごさせていただきました。

(光本 浩昭 記)



新入会員紹介



はじめまして、昨年より壮年会のお仲間に加えていただきました、平田慎太郎と申します。私は、市川市の国府台女子学院で中学部の副院長として、教務全般に関する仕事をしています。国府台女子学院は龍谷総合学園に所属する、浄土真宗本願寺派の宗門校で、親鸞聖人の教えを教育の根幹にすえた学校です。

ご縁がありまして、平野住職のお嬢様も現在本学院高等部に通われ、日々の学校生活を送っています。

また私は、昨年夏に本山で得度し、釋慎永という法名をいただきました。肩書だけは僧侶ですが、まだまだ勉強不足で、お恥ずかしながらお聴聞も満足にできていません。

今後、中原寺、壮年会との活動の中で、勉強して行きたいと思っています。

趣味は料理で、最近中華麺を打つことに凝っています。昔ながらの鋳物製の製麺機を手に入れ、小麦粉の種類や水の量を変えた様々な種類の麺を作って、ラーメンを家族に振る舞っています。まだ豚骨を長時間煮たり…というスープ作りには挑戦していませんが、いつか全部手作りのラーメンを作りたいです。

新型コロナウイルスの流行は、私達の考え方に大きく影響を与えました。特に、今まで当たり前のようにできていたことができなくなり、病気への恐怖が社会全体に偏見や差別を生んでいます。

こんな状況だからこそ、今できることに感謝の気持ちを持ち、有り難い一日を精一杯生きる、仏教者の生活を大切に、日々精進してまいりたいと思っています。

合掌 (平田 慎太郎 記)

編集後記(壮年会だより)：令和3年6月「春夏号」会報

“非常事態”とか“まん延防止”とか暗い話ばかりですが、燦然と輝く明るいニュースは、大谷翔平選手の活躍ですね。壮年会でも又新しい会員平田慎太郎さんのご紹介が出来ました。壮年会をもっと明るくするには、もっと多くの方のご参加を、と願っています。

壮年会だより

令和3年6月「春夏号」 中原寺仏教壮年会だより Vol. 31



新型コロナのワクチン接種が大騒ぎになっています。このワクチンは、ご存知のように全て外国産で7千億円だそうです。なぜ国産ワクチン開発が「一周遅れ」となったのか。

それは3年前に厚労省が数億円の治験予算をケッチってカットしたからだそうです。まさに「一文惜しみの百知らず」です。お釈迦様も「理法を愛する人は栄え、理法を嫌う人は敗れる」『ブツダのことは』とおっしゃいました。実に仏法は合理的な「智慧」だと思えます。

【住・職・閑・話】



脚本家や映画監督として活躍している三谷幸喜さんのエッセイに、自身の息子さんのエピソードが紹介されていました。三谷さん自身が子どもの頃に読んで、とても感動した「泣いた赤鬼」という絵本をぜひ息子さんにも知ってほしいと、読み聞かせをしたそうです。

簡単にそのあらすじを紹介します。人間と仲良くなりたい赤鬼。青鬼は赤鬼のために一肌脱ぐことにします。自分が悪者なって村人を襲い、それを赤鬼が懲らしめることによって、村人たちは赤鬼に感謝の念を抱き、仲良くなるだろうと策を講じました。青鬼の計画通り、それをきっかけ赤鬼は村人と友だちになり、楽しい毎日を過ごしていました。すっかり悪者のイメージがついた青鬼は、自分が赤鬼の近くにいたら、赤鬼も悪者だと思われるだろうからと、手紙を残して自ら山を去っていくという話です。

三谷さんは、自分が子どもの頃に読んだ時のように、息子さんが感動で涙を流すのだろうと少し期待をしていたのですが、実際はそうではなかったとのこと。息子さんに感想を聞くと、「最初は赤鬼が村人から嫌われていて悲しかったけど、途中、青鬼が頑張ってる、そこは楽しくて、でもそのせいで青鬼がいなくなったんで、また悲しくなり、最後の手紙でホッとした」というものでした。

一番の泣き所である手紙の部分でなぜホッとしたのか、三谷さんが不思議に思っていると、「僕も最初は青鬼にもう会えないかと思って、泣きそうになってけど、『しばらく、きみとおわかれ』と手紙に書いてあるから、ホッとした。しばらくということは、ずっとじゃないってことだよ。大丈夫、青鬼は必ず帰ってくる」と答えたそうです。

「しばらく」という言葉ひとつから、そこまで読み取った6歳の息子さんにびっくりしたのと同時に、「また会える」ことが分かっていることが、こんなにもホッとして安心を得られるということだと改めて考えさせられました。

どんなに熱い友情に結ばれた人であっても、永遠の愛を誓った人であっても、大切に思う家族であっても、いつかは死という縁のなかで別れていかなければならないのが、

私たちの人生です。しかし、縁あって別れていかななくてはならない身であっても、悲しみのままで終わる「いのち」ではなかった、永遠の別れで終わる人生でなかったことを教えてくれるのが、浄土真宗のお救いです。すべてのいのちを必ず「さりの世界」に迎え摂るとの阿弥陀さまの願いが、お浄土として無常の世に生きる私のいのちの帰すべき処を示してくださっています。

妙好人(浄土真宗における篤信の念仏者)として知られる「大和(今の奈良県)の清九郎」は、若いころは酒におぼれ、賭博や窃盗までしていましたが、妻の死を縁として、有難い念仏者となっていきました。妻が遺していった「一足先にお浄土で待っていますから、どうか間違わんようにお参りを…」との言葉が、清九郎を仏法聴聞の場に足を向かわせます。死んだ妻に会いたいとの一念で聴聞を重ねるうちに、南無阿弥陀仏のお念仏を称えるなかに亡き妻とたった一ヶ処会える世界に気づいていきます。そして、「お浄土は遠い処と聞いていましたが、近いも近い、お念仏する処にきてくださっているのをごぞいました。

自分から願うて参るお浄土なら、間違っるとんだ処に行く心配もあるが、阿弥陀さまがつれて戻ってくださるのじゃで、凡夫のほうに心配はいらん」という自らの領解をお話されています。

目に見えるものだけを信じ、科学で証明されないものを否定していく生きかたでは、いつまでたってもお浄土は絵空事としか受けとめることしかできません。しかし、阿弥陀さまの願いに出会い真実のみ教えに触れ、自分の価値観がひっくり返されると、浄土の存在がはっきりと確かめられることを清九郎が教えてくれます。

